上代・中古語の推量助動詞ベシ

井島正博

はじめに

古典語の推量助動詞ベシおよびマジは、それ以外の推量助動詞と異なる点を多々持っている。まず第一にいわゆる推量・適当・可能・当為・命令などと呼ばれる非常に広い意味を持っている。第二に、他の推量助動詞は多く終止・連体・已然の三形しかないのに対して、ベシ・マジは活用形がほぼ完備しており、とりわけ連用形を持っている。第三に、多くの推量助動詞は他の助動詞が下接することがないのに対して、ベシはベカリ-キ・ベカリ-ケリのように過去助動詞も、ベカリ-ツのように完了助動詞も、ベカラ-ズのように打消助動詞も、そしてなんとベカラ-ム・ベカラ-マシ・ベカリ-ケム・ベカル-ラシ・ベカル-メリのように他の推量助動詞も下接する（ベカリ-ツについては井島（二〇〇七・八、一一・二）においてこの場合のベシは〈可能性〉といった意味を表わすと論じた）。第四に、井島（二〇一四・一）で論じたように、ベシ・マジ以外の推量助動詞は非現実推量を表わすか現実推量を表わすかのどちらかであった（この点に関しては後述）のに対して、ベシ・マジは非現実推量・現実推量双方の意味を表わす場合がある。そして第五に、ベシは打消および疑問・反語に用いられた場合、特殊な振る舞いをする。第六に、第三点とも関わるが、ベシは打消助動詞ズ、断定助動詞ナリの上にも下にも承接する。以上のような独特の特徴を持つベシをどのように了解すればよいのかが本稿の課題である。マジに関しては後考を期したい。

1　諸条件

1・1　方法論

ベシ（・マジ）が多くの意味を持つ（ように見える）ことに関して、これまでの研究では、それらの意味全体がどのような広がりを持つのかというようなものも見られた（その典型的なものとしては川村（一九九五・一〇、九六・六、九八・二）が挙げられる）。しかるに、ベシがはじめから多くの意味を持つ語として成立したとは考えがたい。それでは多くの意味を持つように見えて、実は共通する抽象的な意味を抽出することができるのだと考える方向もありうるが、以下見ていくように、部分的には共通する意味が抽出できても、全体に共通する

と思われる意味を見出すことは大変難しい。おそらく考え得る議論としては、歴史的に意味が拡張したという観点ではなかろうか。ただし、上代において、ベシはすでに後に見出される意味の多くを持っていた。だから資料に見られる歴史的な発生順によって派生関係をたどることはできない。参考になるのは、文字成立以後におけるそれぞれの用法の割合の推移であるが、厳密な数字ではないが、山口（一九九九・一〇）でそれぞれの時代の代表的な作品の冒頭から一〇〇例を抽出して用法の割合が示されている。およそ命題内で働く用法からモダリティとして働く用法（後に示すように〝世界表示〟と呼ぶことになる）の方向へと拡張したと了解してもよさそうである。上代において命題内で働くベシに関する研究として注目されるのは、大鹿（一九九九・三）であるが、そこでは命題内で働くベシのみが連用用法を持つという統語的条件をもとに議論を展開している。本稿は、およそこの方向に沿って、ベシの意味の広がり、並びに歴史的な展開について検討を加えていくことにしたい。

1・2　文法化の方向

ベシには上代にすでにいわゆる推量・適当・可能・当為・命令などといった意味が揃っている。しかしこれらの多くの意味同士は派生関係にあると考えたい。そしてその方向は、いわゆる文法化の方向、すなわち実質語から機能語へ、すなわち命題内の意味からモダリティの意味へという方向へと派生したという立場から論じていきたい。とはいうものの、そのような派生関係は、大鹿（一九九九・三）などですでに採用されている考え方で、特に目新しい指摘ではない。

ここで命題／モダリティという領域を提示したが、これは従来客体的意味／主体的意味（北原（一九八一・九））、対象的意味／作用的意味（中西（一九六九・七、六九・一二）大鹿（一九九九・三））、事態的意味／認識的意味（高山（一九九五・一一））などと呼ばれてきた概念におよそ相当するものである。ただ客体／主体はかつて陳述論の議論の中で用いられてきた概念でもあり、現在では命題／モダリティという術語の方が了解しやすいと思われるのでこちらを採用する。ただし、命題／モダリティという概念にも問題がないわけではなく、これらは現在日本では階層的モダリティ論を背後に持つ概念として了解されている。しかし特に古典語においては、推量助動詞は連体用法・準体用法を持つなど、命題がモダリティに埋め込まれる階層構造をとっているとは考えられない。井島（二〇一四・一）では、少なくとも古典語の推量助動詞は、そういった意味でのモダリティを表わしているわけではなく、当該命題内容が現実世界に属しているのか、非現実世界に属しているのかを表わすものであると考え、「世界表示」と呼んだ。本稿でもそれを踏襲したい。

一方で言語学の世界では、モダリティ論は、認識的モダリティ（epistemic modality）／義務的モダリティ（deontic modality）およびそれを拡張した枠組で論じられるのが通例のように思われる（もち

ろん叙実法（indicative）／叙想法（subjunctive）といった文型によってムードを表わす言語は別にして）。その背景には、たとえば英語のmustやmayが、一方ではニチガイナイ／カモシレナイのように訳される場合と、ナケレバナラナイ／テモヨイのように訳される場合とがあって、前者が認識的モダリティに、後者が義務的モダリティにあたると言われる。英語の法助動詞はwill, shall, canなどすべてにその両面があると論じられる。しかしその二者のモダリティは同一次元で対立しているものなのだろうか。スウィーツァー（一九八二・＊）は歴史的に義務的モダリティから認識的モダリティが派生したと論じている。英語もドイツ語も、法助動詞はもともと動詞から派生したものであるとすれば、動詞からまず義務的モダリティが派生し、そこから認識的モダリティが派生したということになるのではなかろうか。すなわち、義務的モダリティは認識的モダリティよりも命題に近いものということができるのではないだろうか。

日本語において、現代語で義務的モダリティを表わすナケレバナラナイ（義務）／テモヨイ（許可）は、確かに様相論理学（modal logic）の規則性におよそ従う。自然な日本語には必ずしもならないが、ナケレバナラナイとナクテモヨイワケデハナイはほぼ同義（Op ≡ ～P～p）、ナイヨウニシナケレバナラナイワケデハナイとテモヨイもほぼ同義（～O～p ≡ Pp）、ナケレバナラナイワケデハナイとナクテモヨイもほぼ同義（～Op ≡ P～p）、ナイヨウニシナケレバナラナイとテモヨイワケデハナイもほぼ同義（O～p ≡ ～Pp）となる。ここにナケレバナラナイの代わりに動詞を用いた「強いられている」、テモヨイの代わりに「許されている」を代入しても、およそ同様の論理関係が成立することは、井島（二〇一三・三）で示した。動詞表現は言うまでもなく命題内にあるはずであるから、義務的モダリティも認識的モダリティよりも命題側にある、というよりも命題内で働いていると言ってもよいように思われる。大鹿（一九九九・三）も〈義務〉〈許可〉を対象的意味（命題）に振り分けているが、妥当な配置と言うべきだろう。

1・3　連体と連用

連体と連用とは、連体修飾語は体言を修飾し、連用修飾語は用言を修飾するという、統辞構造レベルにおいてはパラレルである（相対名詞は連体修飾語の他、連用修飾語を受ける場合があること（「柱時計の上」「柱時計より三〇センチ上」）、時詞は名詞としても副詞としても用いられること（「昨日の天気」「昨日花子が来た」）など若干の例外はあるが）。しかるに、意味レベル、機能レベルにおいては決してパラレルと言うことはできない。連体修飾節は命題全体を含むことがあるが、連用修飾の場合は「剣もほろろに」「枝もたわわに」などのような特殊な場合を除いて、連用修飾節とはならない（すなわち主述構造を取らない）し、ましてや独立した命題を構成することはない。

ここで想起されるのが古典語の推量助動詞である。ちなみに、現代

語文法においては、推量助動詞は、〝発話時における話し手の主観的態度〟といった定義を持つモダリティの領域に存在し、命題をモダリティが包み込む階層的モダリティ論の観点から議論される。しかるに少なくとも古典語においては、ほとんどの推量助動詞（ラシを除く。井島（二〇一六・五））が決して少なくない連体用法・準体用法を持つ、ということは古典語の推量助動詞は命題の中で働くこともあるということになり、階層的モダリティ論で分析することはできない。そこで井島（二〇一四・一）では、古典語の推量助動詞は、非現実世界の事態か、現実世界の（ではあるが話し手が直接認識したのではない）事態かを示す「世界表示」の機能を担っていると考えた。世界の多くの言語には、叙実法（indicative）と叙想法（subjunctive）の区別があるが、古代日本語には、推量のあり方においてではあるが、同様の区別が見出される（井島（二〇一四・一））。しかし、古英語には叙実法・叙想法の区別があったが、現代英語には一部の仮定表現を除いてその区別がなくなったように、現代日本語でも推量助動詞にそのような区別はなくなっているが、それはおよそ室町時代以降だと考えられる（井島（二〇一八・一一））。

さて、古典語の多くの推量助動詞は、終止・連体・已然の三つの活用形しかない。しかるに連体形は連体用法・準体用法を持っている。現代語の真正モダリティには連体用法はないと言われる（「＊明日来るだろう人」しかし、実際に用例を検索してみると、少なからざる用例が見出される）。それでは古典語の推量助動詞の連体用法・準体用法はどのような意味を表わすのだろうか。非現実の事態を推量する「非現実推量助動詞」（ム・ジ・マシ）の用例は、よく知られるようにおよそ「仮定」を表わすようである。仮定というものも、非現実の事態を条件として挙げるものである。それに対して、現実の事態を推量する「現実推量助動詞」（ラム・ケム・メリ・ナリ）の連体用法の用例は、およそ「伝聞」を表わすようである。伝聞は、事実と思われるが話し手が直接に知らないことを他者から聞き出すことである（井島（二〇一六・五））。それに対してベシ・マジの連体用法・準体用法はどのような意味を持っているのかは、ここではしばらく留保しておきたい。

以上、推量助動詞の連体用法・準体用法において、推量助動詞は世界表示の働きを担っており、それに則った意味を表わしていることを見た。しかるに、連体と連用との対立に話を戻すと、そもそもベシ・マジ以外の推量助動詞には連用形が存在しない。このことは先に見たように、連用修飾節はそれ自体で命題を構成することはなく、命題の構成要素となるものであるため、世界表示の働きは必要とされない。

ここで本稿の中心テーマである、ベシ・マジに戻ってくるわけであるが、ベシ・マジは、およそ活用形が揃っている、就中連用形が数多く見出されるということは、ベシ・マジには世界表示でない（わかりやすくモダリティでない、と言ってもよい）用法がある、特に連用用法はすべて世界表示ではないことを意味することになる。世界表示を表わさないということは、それらの用例は命題内で働いているという

ことになる。そしてここでは、命題内で働く用法がベシ・マジの本来のものであって、そこから世界表示の機能（あるいはモダリティ）へと拡張したと考えたい。その方が、ベシ・マジは、現実推量の用例も非現実推量の用例もどちらも見出されることなどを説明しやすいと考えられるからである。

ここで、かつての陳述論における陳述、あるいは階層的モダリティ論におけるモダリティは、文末にしかくることができなかった。すなわち、話し手が当該命題を事実であると認定するかどうかは文末に限られるという了解のもとに議論が展開されていた。確かに現代語のいわゆる〝真正モダリティ〟と言われるウ・ヨウ・マイ・ダロウは原則として文末すなわち終止形以外には現われない。

しかるに古典語のム・ラム・ケムをはじめとして、ここで問題としているベシ・マジも連体修飾・準体にも用いられる。そこで従来提出されていた〝陳述〟あるいは階層的モダリティ論における〝発話時における話し手の主観的態度〟としての〝モダリティ〟という概念がここには適用できないことになる。ここで提起した「世界表示」という概念は、文末ということに制約は受けない。むしろ前接の内容が命題を構成していた場合に、それが現実世界の事態か、非現実世界の事態かを表示する機能を担っている。このような機能であれば、文末にのみ存在する必要はなく、連体節が何らかの事態を表わしているのであれば適用されるが、連用節に関してはそもそも事態を表わすことがないのであるからここに用いられることはない。

2　潜勢／可能（認識的モダリティ／義務的モダリティ）

大鹿（一九九九・三）は、他の推量助動詞が持っていない連用用法の意味が対象的意味、すなわち命題内の意味であると考える。たとえば現代語のソウダに関して、「雨が降りそうだ」は一方では、すぐ直後の非現実の未来において「雨が降る」ということを〈推量〉していると了解することもできるし、他方では、現在においてすでに実現している「黒い雲が空を覆っている」という事実の表明であると考えることもできる。普通現代語文法において、ヨウダ・ソウダ・ラシイは推量助動詞に分類されることが多いが、そういう意味では命題内で働いていると考えることも充分に可能である。上代語のベシの当初の用法も同じような状況にあったのではなかろうか。すなわち、当初は命題内で働くものであったが、先にソウダで見たように、一方では非現実の事態を予想するような意味あいと、他方ではすでに現実となっている事態を描写するような意味あいとが重複するようなものであったのではなかろうか。そのような意味を持っていたとすれば、命題内にありつつ、最初から現実／非現実といった世界表示と密接な関係にあったと推測される。そして世界表示に意味拡張する場合にも、現実推量へも、非現実推量へもどちらへも意味拡張する素地をもともと備えていたと考えることができる。

以上で簡単に検討したように、ベシには他の推量助動詞とは異なる特徴が見出される。それはおそらくベシ・マジは、最初から世界表示

（モダリティ）を表わすものとして成立したのではなく、命題内要素を表わすものとして成立し、それが世界表示を表わすものに拡張したと考えられることに起因していると思われる。

そのもともとの意味は、〝ある事態が今にも実現しそうな状態である〟といったものであったのではなかろうか。そのように言うと、それではベシはやはりもともとモダリティを表わしていたということになるのか、と思われるかもしれない。しかし命題内にもそのような意味を表わす表現が見出されるのではないだろうか。「年末近い街の喧騒」の「近い」とか、「発車間際の別れの挨拶」の「間際」などもそのような表現と言ってよいかもしれない。現代語のヨウダ・ソウダ・ラシイは推量助動詞と言われているが、これらもむしろ命題側で働いている、あるいはそのような用法を持つのではないだろうか。実際命題内で働くと思われる連用用法も持っている（井島（二〇一八・三）にも多くの実例を示した）。

「今にもホームから落ちそうにふらふら歩いている」

「気に掛かって仕様がないというようにちらちらこちらを見ている」

そこに〝人為が加わることなく〟／〝人為が加わることによって〟という対立する意味が加わることによって、〈潜勢／可能〉というベシの用法の意味対立が生じたと考えられる。ちなみに、先にも述べたように、かつてベシに〈可能〉の意味があるのかが議論されたことがあったが、〝人為が加わることによって〟ある事態が実現されるということは、結果的に〈可能〉に近い意味を表わすということなのではないだろうか。ここで〈可能〉と言っても、デキルや～（ラ）レルが持つ能力可能といった意味を表わすわけではない。あくまで人為が加われば事態が成立する、といった意味である。そういう意味ではいわゆる〝可能〟とは質を異にする。

このような意味を表わす命題内要素が、世界表示（モダリティ）に拡張して、〈潜勢〉の方から認識的モダリティ（epistemic modality）の用法が生じ、〈可能〉の方から義務的モダリティ（deontic modality）の用法が生じたと考えられる。

ちなみに、英語の法助動詞はすべて認識的モダリティと義務的モダリティとの用法を持つと言われているのに対して、日本語の古典語の推量助動詞は、〈意思〉〈勧誘〉を別にすれば、ほとんどのものが認識的モダリティを表わすものに限られている。そのような中で、ベシ・マジのみが義務的モダリティも表わす点でも特殊である。その事情は以上のように考えることができるのではないだろうか。

- （人為なし）潜勢
- （人為あり）可能
  - （不特定の人物）適当
  - （特定の人物）義務・許可

連用形ベクはすべて命題内で働く用法であると考えられた。しかるにそれ以外の活用形の場合にも、世界表示以外に命題内で働くベシが見出されると思われる。ここでベシには過去・完了助動詞が下接する

用例や、なんとさらに推量助動詞が下接する用例も見出されるが、これらもここに用いられたベシは命題内で機能すると考えれば、何ら不自然ではないことになる。

前節でもすでに見たように、ベシは命題内で働く用法と、世界表示の用法とに跨がっている。そのうち連用形による連用修飾用法はすべて命題内で働いていると考えられる。そのうち『万葉集』の用例は、およそベクナル、ベクアリ、ベク思フという形が多く見られる。そのうちベクナルは「暑くなる」「美しくなる」のような、変化を表わす形容詞＋ナルの用法と並行しており、ベシの連用形が命題内で働いていることを支持している。そもそもベシ自体が形容詞型の活用をしている。ベクナルの用例には、「～しそうになる」と訳すことのできる〈潜勢〉用法と、「～することができる」と訳すことができる〈可能〉用法を見出すことができる。（1）aは「私は死にそうになったではありませんか」と〈潜勢〉用法、（1）bは「かずらにできそうになったではないか」と〈可能〉を表わす。

（1）a　常人の恋ふといふよりは余りにて我は死ぬべくなりにたらずや（和礼波之奴倍久奈里尓多良受也）

『万葉集』巻十八・四〇八〇

b　梅の花咲きたる園の青柳は縵にすべくなりにけらずや（可豆良尓須倍久奈利尓家良受夜）　巻五・八一七

次にベクアリであるが、ここではさらに助動詞を下接したベクアリケリ、ベクアルラシなどは除いておく。動詞アリは単にベクを述語化する形式的な動詞ではないであろう。単に述語として終止するためには、ベシという終止形がある。このアリは「～という状態である」といった意味を表わしていると考えられる。これも現代語としてはちょっと使いにくくはあるが、形容詞に「淋しくある」などの用法があるのと並行的である。ここにも「～しそうだ」と訳すことのできる〈潜勢〉用法と、「～できる」と訳すことのできる〈可能〉用法とが見出される。（2）aは「妻が干してくれそうもないのに」と〈潜勢〉、（2）bは「この川を船は通って行けるというが」と〈可能〉、（2）cは「生きていても結婚できようか」と〈可能〉、（2）dは「鄙に一日でもいられるものか」と〈可能〉を表わす。

（2）a　ぬばたまの妹が乾すべくあらなくに（伊毛我保須倍久安良奈久尓）我が衣手を濡れていかにせむ　巻十五・三七一二

b　この川ゆ船は行くべくありといへど（船可行雖在）渡り瀬ごとに守る人あり　巻七・一三〇七

c　…和文たまき賤しき我が故ますらをの争ふ見れば生けりとも逢ふべくあれや（応合有哉）…　巻五・一八〇九

d　…なでしこがその花妻にさ百合花ゆりも逢はむと慰むる心しなくは天離る鄙に一日もあるべくもあれや（安流へ久母安礼也）　巻十八・四一一三

さらにベク思フも、形容詞に「嬉しく思う」「辛く思う」のように（情意）形容詞＋思フの用法があるのと並行的である。ベク思フにも〈潜勢〉用法と〈可能〉用法とが見出される。（3）aは「死にそうに

思われる」と〈潜勢〉、（3）bは「別れてもまた逢うことができると思えたら」と〈可能〉を表わす。

（3）a　恋ふること増される今は玉の緒の絶えて乱れて死ぬべく思ほゆ（可死所念）　巻十二・三〇八三

b　別れてもまたも逢ふべく思ほへば（復毛可遭所念者）心乱れて我恋ひめやも　巻九・一八〇五

以上のように、ベシの連用形は、いずれも形容詞連用形の用法と並行しており、形容詞連用形と同じく命題内で機能していると考えられる。しかしベシの連用形の用法はそれに留まらず、さまざまな動詞に付き、〈潜勢〉は「～そうになるように」から「～ほどに」といった程度を表わす用法へと拡張し、〈可能〉は「～ことができるように」から「～するために」といった目的を表わす用法へと拡張しているようである。（4）aは「濡れ通るほど雨よ降ってくれるな」と〈潜勢〉、（4）bは「人が知るほど嘆かないでください」と〈潜勢〉、（4）cは「後世の語りぐさになるように名を立てるべきだ」と〈可能〉、（4）dは「かずらにできるほどに芽が出たことだ」と〈可能〉を表わす。

（4）a　通るべく（可融）雨はな降りそ我妹子が形見の衣我下に着り　巻七・一〇九一

b　思ひ出でて音には泣くともいちしろく人の知るべく（人之可知）嘆かすなゆめ　巻十一・二六〇四

c　…後の世の語り継ぐべく（可多利都具倍久）名を立つべしも　巻十九・四一六四

d　霜枯れの冬の柳は見る人の縵にすべく（縵可為）萌えにけるかも　巻十・一八四六

次に、アリを介してではあるが、さらに助動詞が下接する場合を見てみる。推量助動詞には原則としてさらに助動詞が下接することはないのであるから、これらのベシも命題内で働いていると考えられる。ちなみに『万葉集』にはベクアリに下接する助動詞は、およそケリとラシとに限られるようである。次はケリ下接のものであるが、（5）aは「遠く離れて見ればよかったのに」、（5）bは「関わりなしに君はいてくれたらよかった」、（5）cは「あなたに逢わずにいればよかった」といずれも〈適当〉の意味に解釈されるが、これは「～することがありえた（のにそうならなかった）」といった〈可能〉の意味から派生したと言えないだろうか。

（5）a　かくばかり恋ひむものそと知らませば遠く見べくもありけるものを（遠可見有物）　巻十一・二三七二

b　かくのみし相思はざらば天雲のよそにそ君はあるべくありける（可有丶来）　巻十三・三二五九

c　かくばかり恋ひむとかねて知らませば妹をば見ずそあるべくありける（安流倍久安里家留）　巻十五・三七三九

さらに次はラシが下接した例であるが、（6）aは「濁った酒を飲むべきだろう」と〈適当〉を表わしてるように思われるが、（6）bも「酔い泣きすること（が適当）であるらしい」と〈適当〉の解釈が可能であろうが、（6）cは「秋萩は咲きそうになっているにちがいない」と

〈潜勢〉と了解される。ちなみに（6）a・bのラシは逆行推論の解釈は難しいが、中国の故事などをもとにした認識領域（epistemic domain）での推量をしていると考えられる。

（6）a　験なきものを思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし（可飲有良師）　同　巻三・三三八

b　世の中の遊びの道にすずしきは酔ひ泣きするにあるべからし（可有良師）　同　巻三・三四七

c　秋萩は咲きぬべからし（可咲有良之）我がやどの浅茅が花の散りぬる見れば　同　巻八・一五一四

ちなみにこれらの場合、アリの「～という状態である」といった意味が希薄化しているように思われるが、そういった経緯でアリはベシの活用形として吸収されることになるのだろう。これまで見てきたのは、ベシの連用形であったが、終止・連体・已然の活用形に関しても、命題内で働くものが存在するということである。

さて『源氏物語』ではベシに下接する助動詞が以上のように増加する。

推量助動詞が下接する例を見ていくと、（7）aは「今度のも同様にいともまじめなお手紙なので、どうしてお断り申すことができよう」と〈可能〉、（7）bは「なぜにあのお約束をお破り申すことができよう」と〈可能〉、（7）cは「どうしたものだろうかと思い悩んでいらっしゃる」と〈適当〉、（7）dは「この若君が娘を少しは一人前に認めてくださるというのなら」と〈可能性〉（〈潜勢〉から派生か）、（7）eは「ただ、あまりにもくつろいだところがなく、几帳面すぎて、少し賢すぎたとでもいうべきだったでしょうか」と〈適当〉を表わしているようである。

（7）a　（宣旨は）をかしやかに、（源氏の朝顔の姫君に対する）気色ばめる御文などのあらこそ、とかくも聞こえ返さめ、年ごろも、公ざまのをりをりの御とぶらひなどは聞こえならはしたまひていとまめやかなれば、いかがは聞こえも紛らはすべからむ、ともてわづらふべし。　『源氏物語』少女　三・12

b　（鬚黒大将は）人柄もいとよく、朝廷の御後見となるべかめる下形（したがた）なるを、などかはあらむと思しながら、かの大臣（源氏）のかくしたまへることを、いかがは聞こえ返すべからん、さるやうあることにこそ、と心得たまへる筋さへあれば、まかせきこえたまへり。　藤袴　三・334

c　さりとても、また、（中の君が）せめて心ごはく、絶え籠りてもたけかるまじく、浅からぬ仲の契りも絶えはてぬべき御住まひを、匂宮「いかに思しえたるぞ」とのみ、恨みきこえたまふも、すこしはことわりなれば、いかがすべからむ、と思ひ乱れたまへり。　早蕨　五・342

d　惟光→夕霧、惟光の息子、妻「この君達（夕霧）の、（自分の娘を）す

承接		用例数
ベシ	後	
ベカラ	ム	51
ベカラ	マシ	1
ベカリ	ケム	1
ベカ	メリ	150
ベカ	ナリ	10
ベカラ	ズ	1
ベカリ	キ	20
ベカリ	ケリ	68
ベカリ	ツ	4

こし人数に思しぬべからましかば、宮仕よりは、奉りてまし。殿（源氏）の御心おきて（愛人たちに対する処遇）を見るに、見そめたまひてん人を、御心とは忘れたまふまじきにこそ、いと頼もしけれ。明石の入道の例にやならまし」など言へど、みないそぎたちにけり。　少女　三・60

e　源氏→紫の上「…（葵上は）ただ、いとあまり乱れたるところなく、すくすくしく、すこしさかしとやいふべかりけむと、思ふには頼もしく、見るにはわづらはしかりし人ざまになん。…」　若菜下　四・200

メリ・伝聞推定ナリは用例数は多いが、そこでベシはいずれも〈可能性〉といった意味を表わしているようである。メリも伝聞推定ナリも直接見聞きしたことを表わさない。そのため〈可能性〉のベシと相性がよいのだろう。(8)aは「やはりやり場のない悲しさは、むなしい空にも満ちあふれてしまいそうなのであった」、(8)bは「あなたは私のことをあの人と比べてまるで見下していらっしゃるようです」、(8)cは「殿には姫君がおできになったらしいとのことです」、(8)dは「尚侍になるらしいということです」を表わしている。

(8)a　なほ、行く方なき悲しさは、むなしき空にも満ちぬべかめり。　東屋　六・89

b　人も、あり難しなど、とがむるまでこそあれ。人にはこよなう思ひおとしたまふべかめり。　浮舟　六・130

c　近江の君→弘徽殿の女御「殿（源氏）は御むすめまうけたまふべかなり。あなめでたや。いかなる人、二方にもてなさるらむ。聞けばかれも劣り腹なり」と、あうなげにのたまへば、　行幸　三・312

d　近江の君→柏木ら「あなかま。みな聞きてはべり。尚侍になるべかなり。宮仕にと急ぎ出で立ちはべりしことは、さやうの御かへりみもやとてこそ、なべての女房たちだに仕うまつらぬ事まで、おりたち仕うまつれ。御前のつらくおはしますなり」と恨みかくれば、　行幸　三・312

中世以降は〈禁止〉の意味で多用されるようになるベカラ-ズであるが、中古では『源氏物語』には以下の一例しか見出されず、しかも僧侶の発話として用いられている。仏典などの漢文訓読には早くから用いられており、それが僧侶らしい表現だと認識されていたのだろう。〈適当〉の否定「～てもよいわけではない」から生じたと考えられる。この例はおよそ「残りの命のたとえ一日二日でもだいじにしなくてはならぬものなのだ」を表わしている。

(9)　僧都、僧都→他の僧「（その怪しいものは）まことの人のかたちなり。その命絶えぬるを見る見る棄てんこといみじきことなり。池におよぐ魚、山になく鹿をだに、人にとらへられて死なむとするを見つつ助けざらむは、いと悲しかるべし。人の命久しかるまじきものなれど、残りの命一二日をも惜しまずはあるべからず。…」とのたまひて、　『源氏物語』手習　六・273

ベカリ-ツに関しては、井島（二〇〇七・八＝一一・二）において、

完了助動詞の働きを論じる中で検討したが、ここで用いられているベシの意味は〈可能性〉といったもので、それまでは可能性があったが、ツによってそれがなくなったことを表わしていると論じた。(10)aは「これまでの日々少しはお逢いする隙もあったでしょうに」、(10)bは「きっとそら恐ろしくお思いになられたにちがいない昨夜の荒れようだから」の意を表わしており、後者は過去の出来事に対する推量に近くなっている。

(10) a　夕霧→雲居雁「大臣（内大臣）の御心のいとつらければ、さばれ、（雲居雁のことを）思ひやみなんと思へど、恋しうおはせむこそ理（わり）なかるべけれ。などて、すこし隙ありぬべかりつる日ごろ、よそに隔てつらむ」とのたまふさまも、いと若うあはれげなれば、　少女　三・50

b　源氏→夕霧「あやしくあえかにおはする宮（秋好中宮）なり。女どちは、もの恐ろしく思しぬべかりつる夜のさまなれば、げにおろかなりとも思いつらむ」とて、やがて（中宮のもとへ）参りたまふ。　野分　三・267

ベカリ・キのベシは〈可能性〉の意味で用いられ、過去にそのような可能性があったが、実現しなかったことを表わしているようである。およそ(11)aは「逢おうと思えば気兼ねなしに逢うことができた月ごろ」、(11)bは「すんでのところで辺鄙な土地で落ちぶれさせ申してしまいそうでしたが」、(11)cは「ほとんど出家もなさってしまいそうなご様子でした」を表わしている。

(11) a　源氏→中納言の君「また体面あらむことこそ、思へばいと難けれ。かかりける世を知らで、心やすくもありぬべかりし月ごろ、さしも急がで隔てしよ」などのたまへば、（中納言の君は）ものもえ聞こえず泣く。　須磨　二・160

b　乳母→右近「かかる御さま（玉鬘の美貌）を、ほとほとあやしき所に沈めたてまつりぬべかりしに、あたらしく悲しうて、家竈をも棄て、男女の頼むべき子どもにもひき別れてなむ、かへりて知らぬ世の心地する京に参うで来し。…」と言ふ。　玉鬘　三・108

c　紀伊守→妹尼「この大将殿（薫）の御後の（浮舟）は、劣り腹なるべし。（薫が）ことごとしうももてなしたまはざりけるを、いみじう悲しびたまふなり。はじめの（大君の死）、はた、いみじかりき。ほとほと出家もしたまひつべかりきかし」など語る。　手習　六・346

この他に断定ナリを介して他の助動詞が下接する例が見られるが、特に論じるべきことも見当たらないので、用例数のみを挙げる。

承接			用例数
ベシ	ナリ	後	
ベキ	ナラ	ム	1
ベキ	ナ	メリ	17
ベキ	ナリ	φ	6
ベキ	ナラ	ズ	14
ベキ	ナリ	ケリ	2

また、本稿では論じないが、マジに関しても他の助動詞が下接した例が若干存在するが、これも用例数のみを挙げる。

ちなみに連用形ベク＋係助詞ハ（もしくは未然形ベク＋接続助詞ハ（清音））は仮定を表わすと言われるが、これも命題内で〈可能性〉を表わすベシの用例であると考えられる。(12)aは「通り一遍の女と思ってしまえるようなら、ただそれだけの気まぐれとしてでも諦めてしまえそうなことだが」、(12)bは「それでもそこでお過ごしになれるようでしたら、しばらくの間は」の意を表わしている。

承接		用例数
マジ	後	
マジカ	ベシ	1
マジカ	メリ	9
マジカ	ナリ	1
マジカリ	キ	1
マジカリ	ケリ	2 3
マジカリ	ツ	2

(12)a　（源氏が夕顔を）追ひまどはして、なのめに思ひなしつべ‖くは‖、ただかばかりのすさびにても過ぎぬべきことを、さらにさて過ぐしてんと思されず。　夕顔　一・228

b　大輔→中将の君「さらば、かの西の方に、隠ろへたる所し出でて、いとむつかしげなめれど、さても過ぐいたまひつべく‖は‖、しばしのほど」と言ひつかはしつ。　東屋　六・34

さらにベシの後に打消助動詞が伴う、ベカラズ・ベクモアラズ、ベキニアラズ（さらにベクモナシなど）のうち、ベクモアラズのベクも命題内で働くものと考えられる。(13)aは「祭りや祓えや修法など言い尽くすこともできそうにない」、(13)bは「今日はとても動きそうにない」といずれも〈可能〉を表わしているようである。

(13)a　御祈祷方々に隙なくののしる。祭祓修法など言ひ尽くすべ‖くも‖あら‖ず‖。　夕顔　一・255

b「…」と言ひて、（右近は）今日は動くべく‖も‖あら‖ず‖。　蜻蛉　六・215

3　命題／世界表示

命題の内／外、すなわち従来の命題／モダリティといういわば〝縦〟の区別に特に焦点を当てた議論が、中西（一九六九・一二）の「様相的推定」と「論理的推定」、それを受けた堀口（一九七九・三）などである。

このように、ベシには命題内で働く用法と、世界表示（モダリティ）で働く用法があるということに関しては、構文的な証拠として、否定助動詞ズとの承接と、断定助動詞ナリとの承接が示されている。すなわち、命題側で働くベシはズおよびナリの上に承接するのに対して、世界表示側で働くベシはおよそズおよびナリの下に承接するということである。すなわち、打消助動詞ズと断定助動詞ナリとは、およそ命題と世界表示との境界に位置しており、それらの上に承接するものは命題側、それらの下に承接するものは世界表示側の助動詞であるという了解がその背景となる（断定助動詞ナリに関しては北原（一九八一・一一）で議論されている）。

現代語に関してではあるが、かつて渡辺（一九五三・一〇）が相互承接する助動詞の詞と辞とを分割する際、純粋に詞に属する使役・受

身・希望を「第一類」、純粋に辞に属する推量を「第三類」、その両側面を持つ打消・過去完了を「第二類」に分類したが、その第二類が命題とモダリティ（世界表示）を分割する境界を示していると了解されるわけである。ちなみにここにいわゆる〝説明〟を表わすと言われるノダを加えれば、第二類の末尾に位置付けられるだろう。

使役　受身　希望　打消　過去完了　断定　推量　終助詞

走ら-せ-られ-たく-なかっ-た　-　の-だろう-よ

第一類　第二類　第三類

この位置付けは古典語にもおよそ共通するものと考えられ、第二類に属する打消助動詞ズと断定助動詞ナリとが命題と世界表示を分割すると了解されるわけである。

命題	世界表示
ベカラ-ズ	ザル-ベシ
ベカル-ナリ	ナル-ベシ

ただし、ベシがズに前接する場合は、ベカラズが多く用いられるようになるのは中世以降であり、むしろベクモアラズ・ベキニアラズあるいはマジが用いられ、それぞれ表わす意味も異なっていたことはつとに明らかにされている（高山（一九九五・一一）など）。

4　現実／非現実

井島（二〇一四・一）では、いわゆる推量助動詞全体が、非現実推量助動詞と現実推量助動詞とに二分できることを論じた。すなわち、現代語ではその区別がないためにわかりにくいが、古典語には、まだ成立していない事態を推量する「非現実推量助動詞」と、すでに成立していると思われるが話し手が直接経験してはいない事態を推量する「現実推量助動詞」とがあり、それはおよそ山田（一九〇八・九）における〝非現実の事態を表はす複語尾〟と〝推量を表はす複語尾〟とに相当する。山田はおそらく、この二者の区別には、前者が未然形接続であり、後者が終止形接続であることを大きな根拠にしていると思われる。

井島（二〇一四・一）では、さらに①当該推量助動詞が仮定条件節中に用いられるか、②主節に当該推量助動詞が用いられた場合に仮定条件節をとるか、③当該推量助動詞の用法の中に、推量以外の命令・意志・勧誘などの用法を持つか、という文法的なテストを行った結果、非現実推量助動詞はこれらのテストおよそすべてに当てはまり、現実推量助動詞はおよそすべてに当てはまらないことを確認した。

ただし、ベシ・マジの振舞いは例外的であって、確かに以上の三つ

のテストには当てはまるので非現実推量助動詞としての用法がある一方、終止形接続であり、山田（一九〇八・九）では〝推量を表はす複語尾〟に入れられていることからも現実推量助動詞としての用法も見出される。すなわち両者に跨がった用法を持つことになってしまう。

非現実推量助動詞　ム・ジ・マシ
ベシ・マジ
現実推量助動詞　ラム・ケム・メリ・連体ナリ・ラシ

このことが井島（二〇一四・一）に残された課題となっていた。すなわちどうしてベシ・マジは終止形接続であるにも拘わらず、非現実推量と現実推量とのどちらの用法も持っているのだろうか。

可能性としては、ベシという推量助動詞の成立に関わっていることも考えられる。ベシの語源説としては、大野（一九五六・七）などに示されたウベ説、阪倉（一九六六・五、六九・六）に示された接尾語〜ブ説などがあるが、そこから直接ベシが終止形接続であること、さらには非現実推量と現実推量の両者を表わすことを説明することは難しいのではないだろうか。

ここで小柳（二〇〇四・二）では、いくつかの活用形は〈未実現〉／〈既実現〉で対立しているという点では筆者と立場を共にしているが、さまざまな議論の末、未実現を表わすのが未然形で、既実現を表わすのは連用形と結論付けている。そしてその二つの活用形は、未実現／既実現のどちらかを表わすという意味で有標であり、それに対して終止形は単に動詞の意味内容を表わすだけで、未実現／既実現に関しては中立であるという意味で無標であると論じる。

有標　無標　有標
未然形　↓　終止形　↑　連用形
未実現　（向実現）　既実現

小柳（二〇〇四・二）の立場に立てば、終止形承接のベシが非現実推量／現実推量の双方を表わすということは説明がつきそうに思われる。ただしすると今度は、それ以外の終止形承接の推量助動詞、ラム・ラシ・メリ・終止ナリがどうして現実推量だけを表わし、どうして非現実推量を表わさないのかが問題となる。たまたま（のように思われるが）ケムは連用形承接であるので現実推量に限られることはうまく説明できるのであるが。

ここで大鹿（一九九九・三）はベシの中核的な意味を「〜の状態」あるいは「ある事態が内在する状態」のように説明するが、小柳（二〇〇四・二）は「事態が未だ実現に至っていないが大きく実現に傾いている状態を表すと考えられる」とまとめており、従うべきであろう。

すなわち、ベシによって示された事態は、まだ実現していないという意味においては非現実であるが、眼前にその兆候が見出されるとい

う意味においては現実という二重性を持っており、用例により非現実に偏ることもあれば現実に偏ることもあるということなのではないだろうか。実はその経緯は個々の歌の解釈の中で、中西（一九六九・一二）にも説明されていた。たとえば、

十月時雨の常か、わが背子が宿の黄葉散りぬべく見ゆ（万葉・四二五九）

に対して、「これは「あなたの家の黄葉は、時雨にあって散りそうに見える」という意味であり、現実の「黄葉」自体のうちに「散りぬべき」様相が見えるというのである。すなわち「黄葉」が「散りぬべき」ことは、現実の「黄葉」の様相からみて必然的な結果的事実として予想・推定されるというのである。」と説明している。

以上論じてきたように、ベシが命題内の用法から、世界表示（モダリティ）へと拡張したと考えると、ベシ以外の上代・中古の推量助動詞が、現実推量と非現実推量とに分化していた状況にさらされることになったと考えられる。それでは、ベシはそのどちらかの用法のみで用いられたのかというと、どうやら現実推量の用例も、非現実推量の用例もどちらも見出されるようである。

ここで先に示した、現実推量を表わすか非現実推量を表わすかを区別するテストを、上代のベシに適用してみたい。

まず、①仮定条件節中に用いられるかどうか、というテストであるが、上代のベシはまだベクハという形で仮定条件節を構成することはなかったようである。しかるに、中古に入ると初期からベクハは決して珍しくはない。

(14) a　ゆく蛍雲のうへまでいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ
『伊勢物語』四十五段　138

b　おどろきて、「いとをかしきことかな。よみてんやは。よみつべくは、はやいへかし」といふ。
『土佐日記』34

c　これよりやがて長精進して、山でらにこもりなんに、さてもありぬべくは、いかでなほ世の人のたえやすく、そむくかたにもやなりなましと思ひたつを、
『蜻蛉日記』212

d　「さらば、ともかくも、きんぢがこゝろ。いで給ひぬべくは、車よせさせよ」といひもはてぬに、
同　238

e　かへりごとに、「…みたまひなれにしところにて、いまひとたびきこゆべくは思ひし」など、たえたるさまにものしつ
同　292

f　干る潮の満ちかへるまに消ぬべくは何か難波の潟をだに見む
『平中物語』65

g　「今宵、もし、月おもしろくは、来かし。たばかり見つべくは」といひたれば、「何のよき事」と来にけり
同　89

h　「げにことわりには侍れど、いみじき継母といへど、北の方の御心のいみじうま、しきよしは、さまざまもきかせ給へれば、さこそおもほすらめ。たゞ、御心だにたのみたてまつりぬべくは、いかに嬉しからん」
『落窪物語』62

i　和泉殿へ文かく。「…取りますべきくだ物などなん侍りぬべ

くは、少したまわらせよ。…」　同　68

j　帥、「…人侍らばこそ、つゝましくも思さめ、幼き人ばかりなん。それを、便なかるべくは、離れたる方におき侍りなむ。…」との給へば、　同　235

次に、②確定条件節を受ける推量主節中に用いられるだけでなく、仮定条件節を受ける推量主節中に用いられるかどうか、というテストであるが、これは『万葉集』中にも、決して少なくはない。

(15) a　都なる荒れたる家にひとり寝ば（一宿者）旅にまさりて苦しかるべし（可辛苦）　巻三・四四〇

b　風吹きて海は荒るとも明日と言はば（明日言）久しくあるべし（応久）君がまにまに　巻七・一三〇九

c　かくのみし恋ひば死ぬべみ（恋者可死）たらちねの母にも告げつ止まず通はせ　巻十一・二五七〇

d　我妹子に恋ひつつあらずは（恋乍不有者）刈り薦の思ひ乱れて死ぬべきものを（応死鬼乎）　巻十一・二七六五

e　玉釧（たまくしろ）まき寝る妹もあらばこそ（有者許増）夜の長けくも嬉しかるべき（歓有倍吉）　巻十二・二八六五

f　夕々に我が立ち待つにけだしくも君来まさずは（君不来益者）苦しかるべし（応辛苦）　巻十二・二九二九

g　なかなかに死なば安けむ見ず久ならば（美受比佐奈良婆）すべなかるべし（須敝奈可流倍思）　巻十七・三九三四

h　…鹿子じものただひとりして朝戸出のかなしき我が子あらたまの年の緒長く相見ずは（安比美受波）恋しくあるべし（古非之久安流倍之）今日だにも言問ひせむと惜しみつつ…　巻二十・四四〇八

逆接仮定のトモと共起している例には以下のようなものがある。

(16) a　今は我は死なむよ我が背生けりとも（生十方）我に寄るべしと（吾二可縁跡）言ふといはなくに　巻四・六八四

b　言問はぬ木にはありとも（樹尓波安里等母）うるはしき君が手馴れの琴にしあるべし（許等尓之安流倍志）　巻五・八一一

c　万代に年は来経（きふ）とも（得之波岐布得母）梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし（佐吉和多留倍子）　巻五・八三〇

d　…こちごちの花の盛りに見（め）さずとも（雖不見）かにもかくにも君がみ行きは今にしあるべし（今西応有）　巻九・一七四九

e　愛（うるは）しと我が思ふ妹ははやも死なぬか生けりとも（雖生）我に寄るべしと（吾邇応依）人の言はなくに　巻十一・二三五五

f　さ寝ぬ夜は千夜もありとも（千夜毛有十方）我が背子が思ひ悔ゆべき（思可悔）心は持たじ　巻十一・二五二八

また③推量以外にもさまざまな意味を表わす点に関しては、ベシがさまざまな意味を持つことからも当然のことであるが、特に命題外の命令、あるいは意志などの用法を持つ。

(17) a　我が祭る神にはあらずますらをにつきたる神そよく祭るべし（好応祀）　巻三・四〇六

b　剣太刀いよよ研ぐべし（刀具倍之）古ゆさやけく負ひて来に

しその名そ　　巻三・四四六七

以上のように、ベシに非現実推量の意味があることは論証されるが、これら三つのテストに合格したからといって、すべてのベシの用例が非現実推量を表わすことが論証されたわけではない。勿論これらの特徴を持たないベシの用例もあり、その中には現実推量を表わす例も見出される。疑問の例が多く見られるが、ベシの疑問はおよそ現実がどうであるかを尋ねる表現であるから、ベシは現実推量を表わすことになる。およそ（18）aは「上ご自身もどうお思いでいらっしゃるか」、（18）bは「学問なども公務の面でも人に負けをおとりになることはないらしい」、（18）cは「やはり、何かわけがあって、いつまでもこうしたままで世の中を恨んでいらっしゃるお方なのでしょうか」、（18）dは「この家をお守りになるべき方がお立ち出でになってよいものでしょうか」、（18）eは「二人の仲をつまらなく憂鬱と思っている様子、だがどうしてそんなにまで思うことがあろう」の意を表わす。

（18）a　（中将の君は）胸つぶれ騒ぎて、「人もけしからぬさまに言ひ思ふらむ。正身（さうじみ）もいかが思すべき。…」　『源氏物語』六・68

b　（匂宮は）才なども、おほやけおほやけしき方も、おくれずぞおはすべき。　六・139

c　中将→母尼　「…なほ、（浮舟は）いかなるさまに世を恨みて、いつまでおはすべき人ぞ」などありさま問ひて、　手習　六・317

d　中将のおもと

「浅けれど石間の水はすみはてて宿もる君やかけはなるべき思ひかけざりしことなり。かくて別れたてまつらんことよ」と言へば、　真木柱　三・365

e　（源氏は）世の中を、あぢきなくうし、と思ひ知る気色、などかさしも思ふべき。心やすく立ち出でて、おほぞうの住まひはせじ、と思へるを、　薄雲　二・455

川村（一九九五・一〇）において、A類「観念上の事態成立主張用法」のうちA1「現実世界接触用法」のさらに〈推量〉および〈兆し・気配〉は用例が（「一般論としての事態」）「未実現の事態」「現在の事態」に分けられているが、「未実現の事態」は非現実推量に、「現在の事態」は現実推量にあたる。ちなみにA1の「現実世界接触用法」は「その事態が現実世界に実際に生起するか否かという関心において、非現実の事態を述べる用法である」としつつも、「現在の事態」に関しては、「話者の認識している時空とは別の時点・空間においては、現実世界に存在するものとして、思い描かれた事態である」という苦しい説明をしている。それよりも、認識的モダリティ（世界表示）の用法においては、他の推量助動詞が、現実推量と非現実推量とに分かれているのに対して、ベシはその両方の用法を持つと述べる方がすっきりするのではなかろうか。

さてここでベシとムとを比較すると、共通する意味が多いことに気が付く。〈意志〉〈適当〉〈命令〉〈勧誘〉、〈推量〉、あるいは〈仮定〉（ベシはベクハの形で、ムはムハもしくは連体・準体用法において）など

である。ここには共通の派生過程が見出されるのではないかと考えることができるのではないだろうか。

ムに関しては、おそらくすべての用法に共通する意味として〈未実現〉といったものが考えられ、さまざまな意味は語用論的に派生すると考えることができた。一人称すなわち話し手自身に関わる事態が〈未実現〉であると述べることは、話し手がそのことを行うつもりがあること、すなわち〈意志〉を表わすことになる。二人称すなわち聞き手に関わる事態が〈未実現〉であると述べることは、聞き手に対してそのことを行うことを勧めること、すなわち〈勧誘〉を表わすことになる。またそれ以外の事態が〈未実現〉であると述べることは、話し手がその事態が近い将来成立すると述べること、すなわち〈（非現実）推量〉を表わすことになる。さらに従属節において当該事態が〈非現実〉であると述べることは、当該事態を〈仮定〉すること（もしくは〈婉曲〉）を表わすことになる。

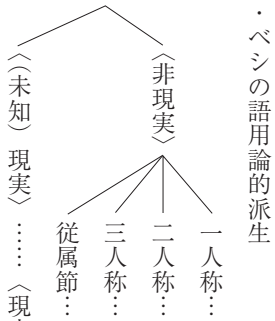
・ムの語用論的派生

〈非現実〉
- 一人称…〈意志〉
- 二人称…〈勧誘〉
- その他…〈推量〉（〈非現実推量〉）
- 従属節…〈仮定〉（もしくは〈婉曲〉）

このような意味拡張は、モダリティ論の観点からすると、〈推量〉は認識的モダリティであるが、〈意志〉や〈勧誘〉〈命令〉はダイナミックモダリティに属し、〈仮定〉に至ってはモダリティとは言いがたいということになるかもしれない。しかしこのような意味拡張は、直感的にも納得しやすく、ベシの意味の派生にも同様の語用論的原理が働いていたと考えられるのではないだろうか。

ただしムに関して、その根本的意味を〈非現実〉とした場合に以上のような派生過程が考えられるのであって、ベシには〈非現実〉事態に用いられる場合と、〈現実〉事態であると考えられるが話し手は直接的にはそのことを知らない場合とが存在した。そして井島（二〇一四・三）でも示したように、後者の場合には〈（現実）推量〉を表わすのみで、それ以外のさまざまな意味の派生は見出されない。以上をまとめると、以下のように示すことができそうである。

・ベシの語用論的派生



おわりに

筆者は古典語の推量助動詞を体系的にとらえることを目指してきたが、ベシの解明に手を焼いていた。しかしこの春定年を迎えることとなり、とりあえずの現状報告として本稿をまとめることにした。まだ疑問・反語あるいは否定に関しては余り論じることができなかったうえに、後半は駆け足で論じることになった。再考を期したい。なお古典本文は『日本古典文学全集』（小学館）を用いた。

参考文献

山田　孝雄（一九〇八・九）『日本文法論』宝文館
吉田　善信（一九三九・六）「助動詞『べし』のあらゆる用法について」『国漢』第六十号 pp.20-21
渡辺　　実（一九五三・一〇）「叙述と陳述―述語文節の構造―」『国語学』第十三・十四輯 pp.20-34
橋本　四郎（一九五五・九）「ベシ・マジの接續面の混亂」『国語学』第二十二輯 pp.49-60
大野　　透（一九五六・七）「ベシ・ベカラズ・マシジ・マジについて」『国語学』第二十五輯 pp.80-89
山田　俊雄（一九五七・一一）「終助詞に続く助動詞　まじ・べし」『国文学　解釈と鑑賞』第二十二巻第十一号 pp.72-82
福島　邦道（一九五九・一）「いわゆる推量の助動詞―七、『べし』の研究」『国文学』臨時増刊 第四巻第二号 pp.121-130　学燈社
大塚　光信（一九六〇・七）「ベシとマイ」『国語国文』第二十九巻第七号 pp.17-34
宮田和一郎（一九六一・三）「助動詞『ぬべし』―源氏物語ところどころ（八）―」『国文学』第六巻第四号 pp.89-91
中田　祝夫（一九六三・五、七、九）「解釈文法雑筆（1）（2）（3）―（その一）苔の細道を踏み分けて・（その二）『べし』と『まじ』およびその『裏』と『表』・（その三）（付）助詞『つつ』の用法の一つ―」『国文学　言語と文芸』第五巻第三・四・五号 pp.59-74,62-68,64-70
大野　　晋（一九六三・六）「古典文法のポイント　推量の助動詞じ・む・らむ・らし・めり・べし」『国文学　解釈と鑑賞』第二十八巻第七号 pp.61-62
桜井　光昭（一九六四・一〇）「推量・古典語　べし（付、べらなり）」『国文学』第九巻第十三号 pp.124-129
阪倉　篤義（一九六六・五）『語構成の研究』角川書店
石田　肇（一九六七・三）「助動詞『べし』の考察」『滋賀大国文』第四号 pp.39-64
佐伯　哲夫（一九六八・一〇）「特集・日本語の助動詞の役割　推量（らし・まし・べし・めり）」『国文学　解釈と鑑賞』第三十三巻第十二号 pp.86-89
鈴木丹士郎（一九六八・一一）「『べし』と『まじ』の接続―文語史上の一問題として―」『専修大人文科学研究所月報』第六号（専修大学人文科学研究所）
阪倉　篤義（一九六九・六）「『べし』『らし』『らむ』『けむ』について」『佐

伯梅友博士古稀記念　国語学論集』表現者 pp.367-380
柏谷　嘉弘（一九六九・五）「特集　助動詞小辞典・文語編―べし―」『月刊文法』第一巻第七号 pp.60-61
中西　宇一（一九六九・一一）「『べし』の推定性―様相と推定と意志―」『万葉』第七十一号 pp.22-45
中西　宇一（一九六九・一二）「特集・新説・新研究　『べし』の意味―様相的推定と論理的推定―」『月刊文法』第二巻第二号 pp.117-123
伊藤　慎吾（一九七一・九）「源氏物語に見えた助動詞ベシの用例　上・下」『武庫川女子大学紀要　人文科学編』第十八集 pp.1-13
尾崎　暢殃（一九七一・一一）「『劔刀いよよ研ぐべし』」『日本文学論究』第三十一号 pp.1-8（国学院大学国語国文学会）
佐田　智明（一九七一・一二）「あゆひ抄における『べし』の里言をめぐって」『北九州大学文学部紀要』第七号（北九州大学）pp.75-86
稲益　保寿（一九七四・三）「『べし』の意味の相関について―万葉集を中心にして―」『薩摩路』第十八号 pp.16-23
小林　賢次（一九七七・九）「「ベシトモ覚エズ」考」『香川大学国文研究』第二号（香川大学）
堀口　和吉（一九七九・三）「助動詞の意味―〝べし〟をめぐって―」『山辺道』第二十三号 pp.22-36（天理大学）
北原　保雄（一九八一・一一）『日本語助動詞の研究』大修館書店
田島　毓堂（一九八二・七）「法華経為字ベシ訓源流考」『名古屋大学国語国文学』第五十号 pp.1-21（名古屋大学）
Sweetser, Eve（一九八二・＊）Root and epistemic modals: causuality in two worlds, Proceedings of the eighth annual meeting of the Berkeley Linguistic Society（BLS 8）: pp.484-507
伊東　光浩（一九八八・三）「可能の『べし』存疑―八代集に於ける―『中央大学国文』第三十一号 pp.58-73（中央大学）
谷山　尚代（一九八九・一）「助動詞『べし』と『関東べい』」『国文』第七十号 pp.46-59（お茶の水女子大学）
洪　競春（一九九〇・三）「助動詞『べし』の可能表現について―日漢比較による検討―」『中京国文学』第九号 pp.50-59（中京大学）
内藤　聡子（一九九〇・七）「『源氏物語』における『つべし』『ぬべし』」『愛知大学国文学』第三十号 pp.38-45（愛知大学）
堀畑　正臣（一九九一・九）「平安時代の記録体に於ける『須（すべからく～べし）』の用法に就いて」『訓点語と訓点資料』第八十七号 pp.14-30
清水　康行（一九九三・二）「『日米和親条約』の言語と文体―漢文和解版の〝候文〟と蘭文和解版の〝べしべからず文〟―」『近代語研究』第九号（近代語学会）pp.315-333 武蔵野書院
伊東　光浩（一九九四・七）「『べし』の分類」『短大論叢』第九十二号 pp.9-23（関東学院女子短期大学）
荒木　浩（一九九四・一二）「〈なるべし〉という表現のこと―〈自記〉と〈他記〉とのあわい―」『待兼山論叢』第二十八号 pp.1-18（大阪大学）
伊東　光浩（一九九五・一〇）「『べし』の違い―古今集と三宝絵詞―」『築島裕博士古稀記念　国語学論集』（築島裕博士古稀記念会）pp.311-332 汲古書院
川村　大（一九九五・一〇）「ベシの諸用法の位置関係」『築島裕博士古稀記念　国語学論集』（築島裕博士古稀記念会）pp.333-354 汲古書院
高山　善行（一九九五・一一）「助動詞ベシと否定」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集日本語の研究』（宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会）pp.146-164 明治書院
川村　大（一九九六・六）「ベシの表す意味―肯定・否定・疑問の文環境の中で―」『山口明穂教授還暦記念　国語学論集』（山口明穂教授還暦記念会）pp.175-194 明治書院
甲原美由紀（一九九六・八）「『源氏物語』における助動詞『む』と『べし』と」『国語の研究』第二十三号 pp.49-56（大分大学国語国文学会）
高山　善行（一九九六・一〇）「助動詞ベシの成立―意味変化の視点から―」『国語語彙史の研究』第十六巻　阪倉篤義博士追悼号（国語語彙史研究会）pp.159-174 和泉書院

田中　雅和（一九九七・五）「中世和漢混淆文における『べシ』の否定表現―和文語『マジ』との関係から―」『鎌倉時代語研究』第二十輯（鎌倉時代語研究会）pp.47-80 武蔵野書院
川村　大（一九九八・二）「事態の妥当性を述べるべシをめぐって」『東京大学国語研究室創設百周年記念　国語研究論集』（東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会）pp.208-229 汲古書院
伊東　光浩（一九九八・三）「＜共同研究：日本語・日本文学における『女性』性と『男性』性（2）＞可・応の『べし』（1）―『応』字の場合―」『生活文化研究』第五号 pp.3-12（関東学院女子短期大学生活文化研究所）
伊東　光浩（一九九九・三）「＜共同研究＞可・応の「べし」（2）―『可』字採択が回避される表記上の要因について―」『生活文化研究』第六号 pp.1-13（関東学院女子短期大学生活文化研究所）
大鹿　薫久（一九九九・三）「『べし』の文法的意味について」『森重先生喜寿記念　ことばとことのは』森重先生喜寿記念ことばとことのは刊行会 pp.51-71 和泉書院
川村　大（一九九九・三）「マジの表す意味―べシとの対比において―」『東京外国語大学日本研究教育年報』第三号 pp.55-79（東京外国語大学）
山口　堯二（一九九九・一〇）「『べし』の通時的変化」『京都語文』第四号 pp.186-205（仏教大学国語国文学会）（『助動詞史を探る』（二〇〇三・九）和泉書院　所収）
山口　堯二（二〇〇〇・三）「中世末期口語における『べし』の後身―『天草版平家物語』の訳語による―」『仏教大学文学部論集』第八十四号 pp.55-68（仏教大学）（『助動詞史を探る』（二〇〇三・九）和泉書院　所収）
川村　大（二〇〇二・二）「特集　モダリティ・ムード・叙法　叙法と意味―古代語べシの場合―」『日本語学』第二十一巻第二号 pp.28-37
谷光　忠彦（二〇〇二・二）「＜研究ノート＞今昔物語集の『べし』の表記について」『明海日本語』第七号 pp.19-22（明海大学）
堀畑　正臣（二〇〇二・二）「古文書（『平安遺文』）における『須（すべから く～べし）』の用法について」『国語国文学研究』第三十七号 pp.383-401（熊本大学）
권　경애（二〇〇二・一二）「延慶本 平家物語에 나타나는［マジ］［ぐカラズ］［ザルベシ］의 쓰임새에 대하여」『日本研究』第十九輯 pp.177-190（韓國外國語大學校外國學綜合研究센터日本研究所）
坂詰　力治（二〇〇二・三）「中世における助動詞の接続用法に関する一考察―終止形接続の助動詞『まじ』『らん』『べし』を中心に―」『文学論藻（東洋大学文学部紀要　日本文学文化篇）』第七十六号 pp.210-223（東洋大学）
小柳　智一（二〇〇四・二）「ベシ・ラシ・ラムの接続について」『国学院雑誌』第百五巻第二号 pp.16-31（国学院大学）
ナロック，ハイコ（二〇〇四・一〇）「メリ、ベシの過去と『連体ナリ』」『国語国文』第七十三巻第十号 pp.49-66
鎌倉　暄子（二〇〇四・一二）「いわゆる推量の助動詞『べし』について―その本質と成立に関連して―」『香椎潟』第五十号 pp.95-134（福岡女子大学国文学会）
青野　順也（二〇〇五・五）「『べし』の表記と意味―万葉集における―」『古代中世文学論考』第十五号（古代中世文学論考刊行会）pp.7-37 新典社
渋谷　勝己・沢村　美幸・大久保　拓麿・松丸　真大（二〇〇六・二）「山形市方言の文末詞シター ベシタ・ガシタの意味にもとづいて―」『阪大日本語研究』第十八号 pp.1-21（大阪大学大学院文学研究科日本語学講座）
井島　正博（二〇〇七・八）「中古語完了助動詞の体系」『国語と国文学』第八十四巻第八号 pp54-67
齋藤　彰（二〇一〇・一）「徒然草の表現―〈べし・べからず〉の用法にみる兼好の論理―」『学苑』第八百三十一号 pp.24-36（昭和女子大学近代文化研究所）
井島　正博（二〇一〇・三）「上代・中古語推量助動詞の疑問用法」『東京女子大学日本文学』第 106 号　pp23-53
井島　正博（二〇一一・二）『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房

井島　正博（二〇一一・三）「上代・中古語推量助動詞の確定条件用法」坂詰力治編『言語変化の分析と理論』おうふう　pp116-132
山本佐和子（二〇一二・一）「『ツベイ』と『ツベシイ』―助動詞『ベシ』のシク活用化について―」『日本語の研究』pp.29-44
閔　丙燦（二〇一二・八）「ヘボン・ブラウン訳『馬可伝』における『べし』について」『日本學報』第九十二号　pp.27-38（韓國日本學會［韓国日本学会］）
井島　正博（二〇一三・三）「当為表現の構造と機能」『日本語学論集』第九号 pp133-173
井島　正博（二〇一四・一）「上代・中古語の推量表現の表現原理」益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』ひつじ書房　pp249-278
加藤　恵梨（二〇一五・三）「『-べく』と『-べし』について―日本語教育に役立つ例文づくりのための研究―」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第二十二号 pp.105-117（名古屋大学国際言語センター）
金田　章宏・下地　賀代子（二〇一五・三）「南琉球方言におけるベシ由来形の使用実態」『琉球の方言』第三十九号 pp.141-164（法政大学沖縄文化研究所）
近藤　明（二〇一六・二）「危惧表現形式の一環としての複合助動詞『ヌベシ』『ツベシ』の位置」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』第八号 pp.138-129
長田　成美（二〇一六・三）「『可』と『ベシ』に見た上代の〈表記意識〉―記紀宣命を中心に―」『福岡教育大学国語科研究論集』第五十七号 pp.78-61
井島　正博（二〇一六・五）「上代・中古語推量助動詞の連体・準体用法」『国語と国文学』第九十三巻第五号　pp3-16
仁科　明（二〇一六・六）「状況・論理・価値―上代の『べし』と非現実事態―」『国文学研究』第百七十九号 pp.41-53（早稲田大学）
井島　正博（二〇一八・三）「逆行推論について」『成蹊大学文学部紀要』第53号 pp.193-207
井島　正博（二〇一八・一一）「他言語から見た上代・中古語の推量表現」沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂 pp133-149